

「語り」で賑わうまちづくりを目指して  
「遠野」「語り部」1000人プロジェクト

遠野文化研究センター調査研究課 課長補佐 前川 さおり



民話のふるさと遠野

岩手県遠野市は、北上高地のほぼ中央に位置する盆地で、なだらかな高原には牛馬がのんびり草を食む牧場が広がり、冷涼な気候を生かした野菜やホップ、リンゴなどを取り入れた農業と、農家に民泊するグリーンツーリズムにも力を入れています。柳田国男が遠野の人・佐々木喜善から聞いた民話をまとめた明治43年（1910）に出版した『遠野物語』の舞台として知られています。かつて三陸沿岸と内陸部を結ぶ馬による陸上交通の要衝であり、物資や文化の集散地として栄えました。カッパやザ



遠野盆地

シキワラシなどの多くの民話が語り伝えられています。

「遠野物語」の再発見と民話を活かした取り組み

遠野市の民話や『遠野物語』を活かしたまちづくりは、昭和43年に岩手国体のサッカー会場に内定し、「郷土を理解し遠野に誇りを持つ運動」が展開され、『遠野物語』が再認識されたことに始まります。この頃「民話のふるさと遠野」というキャッチフレーズが誕生し、『遠野物語』ゆかりの地の観光ルート化が開始されました。遠野では昔話を語る人をさす言葉として「語り部」が使用されていますが、「語り部」の草分け的存在が昭和46年から観光客を相手に昔話を語りはじめています。昭和51年には様々な民話を演劇やバレエ、郷土芸能、語りで表現しようという市民手作り舞台「遠野物語ファンタジー」が始まり、昭和59年から「遠野昔ばなし祭り」とならぶ冬季二大イベントとして定着しています。

昭和55年に民話アニメシアターを備えた遠野市立博物館が開館。

その後、農村の暮らしを体験できる伝承園、遠野ふるさと村、とおの物語の館といった観光施設が整備され、語り部の活動拠点となっていました。



昔話語り部と子ども語り部

平成4年のイベント「世界民話博」がきっかけで新たな語り部が増え、平成7年からは「昔話教室」での昔話の学び合いが始まります。後に受講生が中心となって「遠野昔話語り部いろり火の会」を結成しボランティアで語りをするようになり、平成26年には先輩語り部と一緒に活動する「遠野昔話語り部の会」を結

成し、市内外で昔話を披露しています。

語り部1000人プロジェクトについて

平成22年の『遠野物語』発刊100周年を、これからの語りの文化を担う「人づくり」とまちの賑わいづくりの契機にしようと記念事業として「語り部1000人プロジェクト」を始めました。

「語り部」の概念を「昔話」「歴史」「郷土芸能」「食」「生業」の5ジャンルに広げ、遠野文化研究センター（図書館博物館内）に事務局を置いて市民を公募し、市民有識者の認定委員の前で語りを披露してもらい、認定された人には地元産材で作った認定証を交付しています。現在842人が認定され、特に市内4小学校が昔話学習に取り組んでいるため、子ども語り部が420人と最も多く認定されています。

「語り」で賑わうまちづくり

昔話語り部は観光施設や市内外イベントでの実演のほか、後進を育てる「昔話教室」の講師をつとめ、子ども語り部も地域行事などで大人顔負けの語りを披露し、高齢者施設や小学校同士での語り合い交流も行われています。歴史語り部は、観光ガイドや観光タクシー運転手として活躍し、また冬季まちめぐりイベント

ト「遠野町家のひな祭り」で商店のおかみさん達が、雛人形や骨董を店舗に飾りながら城下町の歴史を語っています。

食の語り部は、産直で郷土料理や郷土菓子を提供している団体や個人事業主が多く、岩手県が認定する「食の匠」との合同研修を行い、ステップアップを目指す試みも始めました。

また遠野市が駅前通りの空き店舗を借り上げ、食や歴史の語り部グループの活動場所「語り部スポット」として運営し、語りと物販で観光客をもてなしています。



ひな祭りの歴史語り部

生活文化と地域ブランド化の狭間で

昔話語り部

部は、すでに地域ブランドになった観光客やメディアの前で語る機会が多く、限られた時間の中で語る



歴史語り部（観光ガイド）と生業語り部

ことや一定の「質」を求められます。そのため大人になってから新しく参入する人へのハードルを上げてしまう側面があります。また昔話に懐かしさを覚える世代が減少する中、方言が全く理解できないと語り手聞き手両方にストレスが募ってしまいます。語りや方言の魅力を分かりやすく伝える必要性も感じています。

一方で「語り」は本来、住民同士のコミュニケーションツールであり、娯楽であり、暮らしの文化です。これからも研修や活動の場を広げ、語り部同士の交流を図り、語りの面白さや魅力を認識することを繰り返しながら、市民一人ひとりが遠野の宝玉（たからの）伝承者という誇りを持って暮らしていくってほしいと願っています。「民話のふるさと遠野」の挑戦はこれからも続いていくでしょう。